### 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近代日本における社会学の草創と福沢諭吉の社会学思想の再考察		
Sub Title	The origins of sociology in modern Japan and the sociological thought of Fukuzawa Yukichi		
Author	川合, 隆男(Kawai, Takao)		
Publisher	慶應義塾大学法学研究会		
Publication year	2011		
Jtitle	法學研究:法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and		
	sociology). Vol.84, No.6 (2011. 6) ,p.1- 30		
JaLC DOI			
Abstract			
Notes	十時嚴周先生追悼論文集 論説		
Genre	Journal Article		
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20110628-0001		

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 福沢諭吉の社会学思想の再考察近代日本における社会学の草創と

川 合 隆 男

近代日本における社会学の草創

福沢諭吉の社会思想形成の特徴

福沢諭吉の社会学思想についての再考察

 $\equiv$ 

四 むすびに

# 近代日本における社会学の草創

界である。 わたしたちの身の廻りをみても衣食住や情報通信、 同様に学問の世界も、社会学の領域といえども日進月歩である。 交通、 医 .療等の動きや変化は止まることなく日進月歩 諸学問や社会学の最前線の動向に 0 世

っかり眼をすえて研究を進めていくことは重要である。

同 時に、 いくら新しい種子を次ぎ次ぎと蒔いても育たないからである。本稿は福沢諭吉の社会学思想を中心にとり 学問の歴史を振り返りその土壌を掘り起こし豊かにしていくことも大切である。そうした試みが衰え

あげて日本社会学史研究のひとつの可能性を模索する小論である。

などに一応分けることができる。 を据える学史研究、(c)社会学の個別領域を対象とする学史研究、 の動きに焦点をあてる学史研究、 スペクティブ、イデオロギーをめぐる学史研究、  $\mathbb{H}$ 本社会学史研究の 可能性については、 本稿は、 (e) 社会学の学問運動・活動を担った個々人の足跡に焦点をあてる学史研 a 主に (a) 社会思想ないし社会学思想、 (b) 人々の生活、 の領域に関するものである。  $\widehat{\mathbf{d}}$ 社会問題、 学問運動 社会学説、 社会観察・ 活動 社会学上 0) 社会調 組 織化お 査 0 よび 制 的 ]

られるのである。彼は社会学の学論はしなかったが、 を社会に適用していた点に注目して、「わが社会学の歴史において占むべき彼の地位の重要なることを考えさせ は日本における社会学の成立過程において福沢諭吉が特に近代科学の因果的考察法や社会観察を身につけてそれ 手であり」、「一 もに近代日本の社会学史研究の上で先駆的な問題提起をしていたと考える。 意味していたのである」として、中等社会論、市民社会論の視点から福沢の社会学を位置づけていた。 ってきている。 福沢諭吉に関しては広くよく知られて彼の著作も多く、これまでに福沢諭吉についての研究も厖大なものに 田 良三は 「わが国における市民社会の形成と社会学」という論文のなかで「福沢が日本の市民社会形 個 しかし、 の独自の社会学者であったこと」、「福沢の「人間交際の論」とはまごう方なく一個の社会学を 近代日本社会学史研究のなかで彼の社会学思想に関する研究はいまだに極めて少な 社会学を実践したというべきである」と指摘していた。 蔵内数太 成の 旗

げることはなかった。最近になって接した富永健一 他方、『日本社会学の形成 (新曜社、二〇〇八年)では、その序章で「日本の近代化と西洋思想 加藤弘之、外山正一、 建部遯吾、 九人の開拓者たち―』を人物史的に書いた大道安次郎は、 遠藤隆吉、 米田庄太郎、 『思想としての社会学― 高田保馬をとりあげていたが、 福沢諭吉」が取り上げられていたが -産業主義から社会システム理論まで その中で帆 福沢諭吉をとり 足万里 あ 西

討 ン・シモン、 H が充分に深められないままに、近代化、 本における社会学思想の生成という観点からそれまでの歴史的文化的な文脈や福沢の社会学思想そのも コント、 スペンサー」の思想につないでいく構想や論理は、 産業化の視点からのみ福沢の思想をとりあげていきなり 性急の感が否めなかった。 第 0) Ó # 検

四年) てい 社会思想ないし社会学思想、 社会学史— 立されて、 ティブに基づく研究、 主 義 第二次大戦の終戦後にも特に社会学界は活況を呈するようになるが、 た福沢の社会学思想をめぐる問題提起を継承して、もう少し深めて考察してみたいという意図である。 稿で福沢諭吉の の立場からのもの、 など戦 |形成過程と思想構造||](早稲田大学出版部、 漸く河村望 後 H 本の代表的 社会学思想の再考察を試みようとするのは、 武田良三や秋元の研究は市民社会論を軸とする知識社会学的な研究であったといえる。 『日本社会学史研究(上・下)』(人間の科学社、 前述の 社会学上の理論的パースペクティブの領域での研究であり、 な社会学史研究が出現してきた。先に述べた社会学史研究のうちそれらは、 富永健 0) 『思想としての社会学』 一九七九年)、秋元『近代日本と社会学』(学文社、 先にあげた武田良三や蔵内数太が適切に指: は近代主義、 一九七三、一九七五年)、 九六一年に「日本社会学史学会」 産業主 義 河村の研究はマルクス 0 理 秋元律郎 論 的 1 スペ a 日 が ク 本 設

# 福沢諭吉の社会思想形成の特徴

聞 た人物 由 民 わ 明 たしの手元にある 権 治 挿 運 動 四 0 年 風 高揚 刺 一画によ に慎重な姿勢をとる福沢を風刺して「余り深みに踏み込むまい 月一二日号)、 図 n ば 説 福 明治人物事 沢渝 言論人として影響力をもつようになり 吉は何にでも口を出 典 文化人・学者・ す 「躍"蛙 実業家 団団 「手前」 团 珍 をみると、 味噌」 聞 でで」鷺の 明治 0) 一〇年五 当時の新聞 お 福 「二の葦」 の手料 月二六日号)、 理 団団 回団 0) 団 闭 9 珍

て鬼も驚いている様子の挿絵

(『団団珍聞』

明治三四年二月九日号)に描かれていた。

範 珍聞』 (『二六新聞 明治 五年一 明治三三年四月一八日号)、明治三四年二月の福沢の死去に際しては 月二一日号)、 福沢を囲んで慶應義塾同窓会での質素と清潔を旨する会合について「宴会の模 「節分の夜に福が外」とし

ろうとした福沢の生涯を少し斜めに構えて人物挿絵や風刺画として描くと、「躍ッ蛙」 なか描き切れない特徴を持っていたのかもしれない。 料理」、「宴会の模範」、「節分の夜に福が外」などと描かれていたところを考えると、ある特定の人物像ではなか 独立自尊」「一身独立して一国独立する事」を説いて一身にして二生を生き「掃除破壊」 や 「二の葦」、「お と 「建置 を図 の手

か。 対主義の行き方」の「キツネ型」であるとしている。 「キツネ型」の二つに分け、 とではナショナリスト、 く、「いろいろな知識を持っている人が状況に応じて一番妥当な有効な実現性のある知識を使う賢い生き方、 い」と述べている。そして思想家のタイプをイギリス哲学者のI・バーリンの名称を借りて「ハリネズミ型」と ているところであり、 「プラグマティクな思想家」「ナショナル・リベラルな思想家」であり、「……初めは自由主義者、 神山 四郎は 「福沢は固い 人生を振り返って節節に臨機応変に対処していく姿であり、興味深い指摘ではないだろう 国権論者と、 一つの理論を言い張るのではなく、 福沢は「たった一つの大きいことだけを狙ってしゃにむ進むハリネズミ型」では 時代とともに変わったのだ、 『福沢全集』、その「緒言」、 時に応じて「処方箋」を書くのだと言ってい 挫折したのだというふうにはどうもとれ 『福翁自伝』 などにもよく表れ 民権論者、 るし、 相 あ な

視点を変えて、 ということに注目したい。 福沢 0 行 動 傾 向 !の特徴として特に(ⅰ)旺盛な好奇心、(ⅱ) 起業心、(ⅲ) 批判精神、 iv

 $\widehat{\mathbf{i}}$ 旺盛な好奇心 惑溺」の戒め、

鎖国から文明化へ向かう歴史的な激動のもとで福沢諭吉も強い好奇心をもち続けた情動の人であった。 強く知

### (ⅱ) 起業心

情意を持つ人であった。

行・ 吉 も特筆される。また、 宅で集会を催して演説討論の練習を始めて明治八年五月に三田演説館 (明治三~一五年) 福沢は新たにいくつもの事業を起こしたり創業を試みる人でもあった。 保険・ の名で書物問屋組合に加入して出版業の自営に着手して、後の 貿易・ の起業、 鉄道・ 自らの起業にとどまらず広くわが国の経済・実業活動を一 紡績 明治一四年の政変後の明治一五年の新聞社 海運業など幅広く支援し人材をも輩出していった。 「慶應義塾出版社」へと続く福沢 の開設、 『時事新報』 慶應義塾の創設、 大学部の創設 層推進していく必要を説き、 社の創業、 明治 明治六年頃から自 (明治二三年) 二年 一福沢屋 0 出 版 業

## (iii) 批判精神、抵抗精神

習、 除破壊」に志す姿勢が示されていた。そして「門閥の人を悪まずしてその風習をにくむ」として自らも新し ったと考える。 国家と社会の 私のために門閥制 独立自尊」、 「建置経営」 新しい 度は 人間交際のありようを生涯にわたって 親の敵で御座る」という の試みも、 時と場所を見据える批判精神、 『福翁自伝』 「我以做古」を実践しようとした。 の一文のように、 懐疑の精神、 自ら身にしみて前 抵抗精神を失うことはなか 後半生 半 生を 0) 新 風

## .iv) 「惑溺」への戒め

溺 信 今日では 妄信 という言葉がもっとも明確に出てい 尚古、 「惑るる 頑固な文明主義 という言葉も、 辺倒 福沢諭 るの 欧化主義、 吉の思想を理解しようとするうえでは重要な側面 は福沢 『文明論之概略』であり、「古習」、 また極端なイデオロギー 主義・宗教主義などで 「権力偏重」、 である。 「習用 虚 0) 0 迷 惑 久

る「惑溺」への戒めである。

を愛しこれを眷顧し、 あるいはその事物に就き、 甚だしきは他の不便利を問わずしてひたすらこれを保護せんとするに至ることあり」とす(ユン) 実の効用をば忘れて、 ただその物のみを重んじ、これを装いこれを飾り、

化 わたって模索し続けた重層的な思想形成にあるといえる。ここでは、(a) の啓蒙思想との出会いに刺激されつつ、どのようにして文明化にみる民心の発達と国家の独立を図るかを生涯 更に、 福沢の思想形成の特徴は、 基本的には福沢自らの幼少期からの生活体験や歴史経験に支えられ 経験の思想化、  $\widehat{b}$ 学問による思 て、 欧 米

至極だから、子供心に腹が立ってたまらぬ」、また、「父母の遺伝」として「私は中津にいて上流士族から蔑視さ 御座る」とあり、「交際、朋友互いに交わって遊ぶ子供遊の間にも、ちゃんと門閥というものを持っていて横 封建の門閥制度に憤ると共に、亡父の心事を察して独り泣くことがあります。 されたところが大きいのではないかと考える。先にも引用したが『福翁自伝』に「私は毎度このことを思い出 れていながら、 り」と記したことは疑いないが、より根底的には自らの生い立ちや体験、 め』で「人は同等なる事」の天賦人権の権利通義の同等を宣言する一方で、権利通義と人の働きとしての有様とめ』で「人は同等なる事」の天賦人権の権利通義の同等を宣言する一方で、権利通義と人の働きとしての有様と して威張るなどということは一寸ともしたことがない」と書いており、こうした経験に支えられて 西洋事情外編』 まりにも有名な天賦 学問のすすめ』 a (c) 歴史状況における再解釈による思想化という三つの働きである。 経験の思想化 私の身分以下の藩士は勿論、 での の初編 「チャンブル氏の経済書」 人権 0) 論のことばである。 冒頭にある「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云えり」という一文は 町人百姓に向かっても、仮初めにも横風に構えてその人目下に見下 翻訳などが確実に強く影響してこのような一文を書かせ「云え これはアメリカ合衆国の独立宣言(一七七六年) 当時の歴史状況での西洋経験に裏打ち 私のために門閥制度は親の敵 の冒 『学問のすす 頭や福

の異なる趣旨を説いていった。

成や著作に西洋経験が土台になっていったといえる。(4) て、 おいて」「それから日本に帰ってから、ソレを台にしてなお色々な原書を調べまた記憶するところを綴り合わ として、特に「原書を調べてソレでわからないことだけをこの逗留中に調べておきたいものだと思って、その方 に文久二(一八六二)年の使節団に「反訳方」として加わり、約一カ年の旅を重ねている。「事情探索の胸算 向でもって、これは相当の人だと思えばその人について調べることに力を尽くして、聞くに従って……しるして カへの渡航、 長崎そして、大阪、 西洋事情というものが出来ました」とあり、その後の慶応三年の(3) 「社会上の習慣風俗は少しも分からない」ままにさまざまな見聞を重ねて帰国している。 緒方塾での蘭学修行、 自ら進んで咸臨丸に乗っての万延元(一八六〇) 「再度米国行き」を含めて、 年初めてのアメ 福沢の思想形 福沢は 更

## (b) 学問による思想化

られてゆく。 緒方洪庵の適塾に学び、兵術、医学、 ば本も読まない」幼少時の福沢が、「十四、 く安政六(一八五九)年に「英学発心」をして特に英学を中心にして福沢の学問展開と思想化が大きく繰り広げ (特に白石常人のもとで)。 福沢自らのさまざまな経験が学問を通じ、 安政元 (一八五四) 物理、 年に兄三之助の勧めで蘭学を志して長崎に遊学し、 技術など蘭学修業に没頭する。 五才にして初めて読書に志」してまず漢学による学問 触媒されて思想化が促されていったといえる。 江戸に出て蘭学塾を開くも、 「手習いもし 更に大阪に出 を開 まもな n

すめ』『文明論之概略』 形成において特に注目されることは、 福沢は三度の 西洋経験と数多くの辞書や書物の購入を試みてそれらを基にして 等々の著述出版活動、 「専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学」の強調である。 演説など啓蒙思想家として邁進していった。 『西洋事 情 福沢の学問 を始め 『学問 P

Hill Burton)(一八〇九―一八八一)の著作であることを明らかにしている。更に、(15) 編 試みたり、 二〇〇七年)、などがある。また、 文献等をA・M and, for private instruction, あたって克明に追跡している研究として、 刊行された『政治経済学―学校用および独学のために』であり、 Μ (名古屋大学出版会、一九九五年)、安西敏三 Chanbers) 手拓本とJ・ クレイグが 沢 (慶応三年) において福沢はその「題言」で「因て今英人チャンブル氏所撰の経済書を訳 の思 増補して三冊と為し、 想形 それらを土台に構想して著述していったことはよく知られているところである。 出版のものであったので、長く「チェンバース経済書」などと言及されてきたが、 『成のうえで数多くの洋書の購入を図ってさまざまな学者の影響のもとに啓蒙思想家として翻 スコットランド思想、 S・ミル、 クレイグと玉置紀夫の著作の中から引用すると、 (1852)1866を指している。この初年者向きの教科書はチェンバース兄弟社 A・d・トクヴィル、 題して西洋事情外編と云う」としていたが、この本はもともとは英国エジンバラで 『学問のすすめ』とF・ウェーランドの書物との関連については板倉卓三の 啓蒙思想、 安西敏三 『福沢諭吉と自由主義 リベラリズムの影響を受けたジョン・ H・スペンサー、W・ 『福沢諭吉と西欧思想 |個人・ 表 1、 原書は Political Economy for use in 自治 表2のとおりである。 バジョット等の著作との関連を原書に 自然法 国体 福沢の著作に影響した思想 功利主義 -』(慶應義塾大学出 ヒル・バート 特に Ļ また、 アルバート 傍ら訳書を鈔 進 一西洋 化 福沢の著 (W. and 事 情外 版会、

新しい文明社会を生きる思想営為を果敢に試みていったといえる。 福沢はこのように経験と学問を通じて西洋の 「事情探索」を重ね、 前半期には多くの翻訳意訳にあたり、 以 後

伊藤正雄

『福沢諭吉論考』(吉川弘文館、

一九六九年)などがある。

# (c) 歴史状況における再解釈による思想化

自らをとりまく状況の再解釈、 再定義の例を挙げれば、 例として、 大阪の緒方洪庵の塾に入塾するという判

### ロック (1632-1708) ハチスン (1694-1746) ケイムズ (1696-1782) リード (1710-1796) ヒューム (1711-1776) ロバートソン (1721-1793) ブラックストーン(1723-1780) スミス (1723-1790) ▶『西洋事情』二編(1870) 『イギリス法釈義』(1765-1769)-ファーガソン(1723-1816) ミラー (1735-1801) ジェファーソン (1743-1826) スチュワート (1753-1856) ▶『西洋事情』初編(1866) 『独立宣言』(1776)-ハミルトン (1788-1856) ウェーランド (1796-1865) 『政治経済学の基礎』(1831) 『道徳科学の基礎』(1865) ▼『西洋事情』外編(1868) バートン (1809-1881) 『学問のすゝめ』(1872-1876) 『政治経済学』(1852) < 一九世紀の文明思想 ▶『ミッチェルの新学校地理』 (1865) 『掌中万国一覧』(1869) 『コーネルの高校地理』 『世界国尽』(1869) 『文明論之概略』(1873) (1866)

### 福沢論吉の初期著作に与えたスコットランド思想の影響

引用:アルバート・M・クレイグ著(足立康・梅津順一訳)『文明と啓蒙―初期福沢論吉の思想―』慶應義塾 大学出版会、2009、p.41

考えるということ ひとつとしてあげられる 述 7 11 た が、 が 時 福 沢 処、 0 思 想 事 形  $\mathcal{O}$ 成 極 0 端

悉ら を 考えざる き 0 釈 脈 騒 断 を 自 上 ら 皆い 時 想 先導者たらんとする決意もその 失 を を 動 野 伝 文 7 便 更 括 像 ح 代と場 断 転 が で 明 12 不 7 す L L 0 11 0) 論之概 あ 0 る。 慶 7 な 時 便 ま 戦 7 以 7 9 か 覚 所とを論ず」 應 手 を論ずる 0) 前 か 7 争 と場所とを 11 ?らず」、 ま 悟 義 とし 軽 で b 13 0) 略 英学 た、 ときに 塾 b 変 を に 私 7 乱 触 申 で 定 第七章 先に 発 が 13 ウ 0 n め せ が 人 居 は、 教育 心 ば、 エ た あ 誤き 0 b 0 江 n る 世 ラ 9 失策と称する な 触 を 世 時代と場 智徳 す ン 7 0 王 戸 たるも (「老余 か れ 13 通 K 中 b 政 で、 処 た 7 じ 出 経 12 維 0 例 が す て文明 事 行 洋 で 済 7 如 新 0) 0) 事 所 る 書 学 蘭 0 わ あ 何 0 半 な 特 極 0 福 る な 際 生 物 0 0 ŋ は 徴 を 法 べ 化 か 翁  $\mathcal{O}$ 命 る

### 表2 福沢の刊行書とその典拠英文献(1868~75年)

刊行年	書名	英書
1867/69	雷銃操法*	A. Walker, The Rifle: its theory and practice, London, 1864.
1868	兵士懐中便覧*	H.L. Scott, Military Dictionary, New York, 1861.
1868	訓蒙窮理図解+	H.G. Bohn, Pictorial Hand-Book of Modern Geography, London, 1861.
		Chambers's Natural Philosophy (Educational Course, 1836/96), 2 vols., Edinburgh.
		S. S. Cornell, Cornell's High School Geography, New York, 1856.
		Mitchell's Modern Atlas, Philadelphia, 1866.
		G.P. Quackenbos, A Natural Philosophy, New York, 1859.
		M.A. Swift, First Lessons on Natural Philosophy for Children, Hartford, 1833.
1869	洋兵明鑑*	E. Schalk, Summary of the Art of War, 2nd ed., Philadelphia, 1862.
1869	掌中万国一覧+	G. Ripley & C. A. Dana, <i>The New American Cyclopaedia</i> , 16 vols., New York, 1866/67.
		J.R. McCulloch, A Dictionary, Geographical, Statistical, and Historical, of Various, Places and Principal Natural Objects in the World, 2 vols., London, 1854.
		G.W. Cox (W.T. Brande ed.), A Dictionary of Science, Literature and Art, 3 vols., London, 1865/67. Cornell, Cornell's High School Geography.
1869	英国議事院談+	Cox, A Dictionary of Science, Literature and Art.
1000	八四級爭匹畝「	W. Blackstone, Commentaries on the Laws of England, 4 vols., London, 1765/69.
		D.L. Beal, The Student's Textbook of English and General History from B.C. 100 to the Present Time, London,
1000	连基 <b>去</b> 网络45十二	1858.
1869	清英交際始末+	英字新聞等
1869	世界国尽+	S.G. Goodrich, Parley's Universal History, New York, 1841.
		Mitchell's Modern Atlas.
1871	啓蒙手習之文	英書典拠なし
1872/76	学問のすいめ	F. Wayland, Elements of Moral Science, Boston, 1834.
		Chambers's Moral Class-Books Advanced Reading (Educational Course).

1872	童蒙教草+	A.F. Tytler, Elements of General History, Edinburgh &
		London, 1866.
1872	かたわ娘	英書典拠なし
1873	改暦弁	不明。
1873	帳合之法+	H.B. Bryant & H.D. Stratton, Common School Bookkeep-
		ing: embracing single and double entry, New York &
		Chicago, 1871.
1873	文字之教	英書典拠なし
1873	会議弁	不 明
1875	文明論之概略	H.T. Buckle, History of Civilization in England, 2 vols.,
		London, 1875.
		Chambers's Political Economy for Use in School and Private
		Instruction, Edinburgh, 1852.
		F. P. G. Guizot, General History of Civilization in Europe,
		Oxford, 1856.
		J.S. Mill, Principles of Political Economy, London, 1848.
		J.S. Mill, On Liberty, London, 1859.
		J.S. Mill, Considerations on Representative Government,
		London, 1861.
		Michell's School Geography.
		Wayland, Elements of Moral Science.

注1. \*:単一英文献翻訳。+:複数英文献翻訳合成。無印:論拠として英文献の一部を使用。 注2. 典拠英文献の大多数は,幾版も重ねているが,筆者の調査しえた限りでの最古の刊行年を 記載した。

出所: 富田 (1941), 富田 (1964), 太田 (1976), 松沢 (1995), British Library (1979/88), American Library Association (1968/80)。上記文献探索に当たっては, ケンブリッジ大学図書館ライブラリアン, スティーヴン・リーズ氏にお世話になった。

引用: 玉置紀夫『起業家福沢論吉の生涯―学で富み富て学び―』有斐閣、2002、pp.90-91

福

沢

の生

涯

0)

分前半期

(天保五

-明治三年、一八三四─一八七○年)では「英学発心」によって主に翻訳を通じた

釈 話 発令、 立自 てい 西洋文明 最 調 文明社会の 人権 中 会開設運動などが激しくなる一方、 分権論』 和 期 晩年期 0) 試みであり、 った。 『福翁百余話』 尊、 の必要」 明 自然権思想、 条約改正運動、 治四 『民情 0) (明治二八 玉 しかし、 紹 「建置経営」 を強調した。 の独立は目的なり、 介導入による封建体制 九年、 新 人生 『福沢全集 |三四 彼 個人主義、 一八七一—一八七六年) 『日本婦人論』 の後半期 「戯去戯來」として人間安心論を軸に処したともいえる。 日清戦争など国権論、 を試みるべく、 年、 持続して人間交際論、 一八九—一九〇一年) (全5巻)』『福翁自伝』 自由主義、 明 今の我文明はこの目的に達するの術」 明治一 治一 0) 『男女交際論』 「掃除破壊」 時事新報社を創業して「政治の診断医」 〇一二七年、 四年政変、 進歩主義、 では 富国強兵主義、 コミュニケーション論、 『学問のすすめ』『文明論之概略』 は脳溢 『貧富論』 0) などを著した。 一八七七—一八九四 アジアや欧米列強をめぐる歴史状況、 産業主義、 開 始、 血症などの大病を患い没するまでの期間 制度の破壊と再構築、 『実業論』 帝国主義へ 経験・実証主義、 生涯と歴史状況における福沢の新たな再解 年 なりと文明化を軸とする啓蒙思想、 などを著して、 の動きも強まっ 社会変動論などが試みられた。 では、 に徹して「公議輿論」と これは制度論 西南戦争、 多事争論などの思想を展開 などの主著を通じての 日本の国民国家、 てい 国会開設、 自 く 時 由民権 0 展開といえる。 期 であっ 教育勅 運 『福翁 福沢 「官民 新たな 動 天賦 た。 独 百 0 玉

# 福沢諭吉の社会学思想についての再考察

-三〇年代)、 近 代日 本の社会学史の iii 形成期 流 (明治四〇年代—大正七年)、(.iv) 成立期 れを大きく区分すると、  $\widehat{\mathbf{i}}$ 草創期 (幕末 (大正八—昭和七年)、( v) 変転期 明治初年)、 îi 生成期 明 治 (昭 〇年代 和

未分化の状態のなかで社会学を生み出していくひとつの模索を試みていたと考える。 確 昭 の導入と創成、 おいて啓蒙思想と社会学思想を展開する過程で、 5 かに 和二〇年終戦)、 科学方法論について触れていきたい。 「社会学につい (2)新しい社会秩序の模索、 vi ての学論はしなかったが」 新たな模索期 (昭和二〇年終戦 (3) 人間交際論と「社会」の発見 自然科学も社会科学(「形ある学問」 (蔵内数太、 —昭和二八年) 前出)、 のように位置づけることができる。 これら草創期と生成期において近代日本に 以下、 (構築)、 も「形なき学問」) 彼の  $\widehat{4}$ 1 社会変動 もい 啓蒙思想 福 沢は、 まだ

## (1) 啓蒙思想の導入と創成

同時代 挑んでい に触れたが、 そして (a) 国での滞在経 私のために門閥制度は親の敵で御座る」という思いを強くしながら、そうした社会制度を変えようと、 先に福沢の の人々がいだくひそかな胎動を感じつつ、 つ 思想形 この啓蒙思想の導入と創成に関してもこうした特徴が大きく関係してい 経験 験や洋書の読書を通じて日本の鎖国 0) 思想化、 成 の特徴について  $\widehat{b}$ 学問による思想化、 i 旺盛な好奇心、 欧米の啓蒙思想の導入を試みながら、 や封建制度、  $\widehat{\mathbf{c}}$ 歴史状況における再解釈による思想化につい ii 門閥制度による世 起業心、 iii 批判精 0 無 る。 知 光をあてて変革しようと 神、 福沢は幼くしてすでに 暗黒、 iv 闇 「惑溺」 のなかでも 欧米諸 て簡 0) 戒 め

玉 あ つながった科学観、 る新たな啓蒙思想を導入していった。そこから近代日本の文明開 のアジアへの進出などもあって、 長く封建制度を支えた儒学による啓蒙 自然権思想、 社会契約説、 日本の洋学者達は (旧学)、 経験的社会論などの一八・ 長年 の慣習、 日 1 口 ツ 政治的 パ 化 中 世 が開始されてい 経済的 0 九世紀の先進欧米の 暗黒を打ち破り な仕組みもほころび始 、った。 アメ 福沢が試みてい 思想哲学の根底に ij 力 独立に め、 などに 欧 ・った 米諸

かわりをめぐる新たな仮説の提示であり、

通有用の実学や実業、 0) まずは特に旧学の漢学、儒学や古い思想、 思想を基にした「建置経営」の試みであった。このことは人間と思考、 制度の「掃除破壊」であり、次いで洋学を揚げて新たに人間 道徳、 歴史との

新たな価値をめぐる思想的な営みでもあった。

あっ<sub>(18</sub>) た。 啓蒙思想やフランス啓蒙思想の強い影響のもとに翻訳意訳され著作されたものであることが分かる。新旧思想の啓蒙思想やフランス啓蒙思想の強い影響のもとに翻訳意訳され著作されたものであることが分かる。新旧思想の よって明治六(一八七四)年設立された「明六社」 混乱状態のなかで森有礼、 『学問のすすめ』(一八七二―七七年)、『文明論之概略』(一八七五年)などはいずれもスコットランド・イギリス 先の表1、表2に示したように、 西村茂樹、 福沢の主要な著作である『西洋事情』(初編・外編、一八六六―一八六八年)、 福沢諭吉、 西周、 の活動もこうした啓蒙思想の導入や普及を図るためのもので 津田真道、神田孝平、加藤弘之、杉享二、中村正直らに

びるようになるのは故なしとしない 啓蒙思想の創成ともいえる。 などは福沢の啓蒙思想とも重なるところであるが、福沢は西洋啓蒙思想の単なる導入や紹介普及にとどまらずに、 日本が置かれた歴史的文脈のもとで彼の教育・著作活動、 近代啓蒙思想の特徴である合理主義、 わが国において第二次世界大戦終了後に福沢諭吉の思想、 個人主義、 自由主義、 演説会や新聞 進歩主義、 『時事新報』 経験的実証主義、 | の発刊などを通じた自らの 啓蒙思想が再び脚光をあ 科学主義、

## (2) 新しい社会秩序の模索

されるようになっている sociology, soziologie などを日本語としてどのように邦訳するのかに関しては困難と苦 して当時の洋学者らには、 洋学や啓蒙思想等に接触する過程でこれまでの世間や世の中の人々の間の結びつき、付き合い、仲間などに関 異文化の society, sociètè, gesellschaft などの西洋の言葉、また現在では社会学と通称

学、世態学、社会学など」の用語が試みられ、 労が重ねた。 「勝利したのである」とされている。(19) 前者については「人間仲間、人間相養生之道、交際、社会など」、後者については「人間学、交際 明治一〇(一八七七)年前後より「社会」、「社会学」の邦訳名が

う本論の文脈においては大切なことである。 することのほうがはるかに重要である」という指摘は、 たか、それが取り扱う問題は何であったか、その発生の背景をなす社会思想の推移はどうであったかなどを理解 めぐる考証も重要である。「しかし社会学の起源について正確な時期を定めることよりも、社会学が何を意図 「society の邦訳名」「sociology の邦訳名」をめぐって、いつ頃にどのように邦訳がなされてきたのかの起源 近代日本社会学の草創期、 生成期の動きを考察するとい

げることができるのではないかと考える。 な考え方、概念を表す言葉として、わたしは「人間・人」、「習慣」、「人間交際」、「家族」、「制度」、「文明」を挙 福沢の主たる著作である『西洋事情』『学問のすすめ』『文明論之概略』 『福翁自伝』などを通じて、 彼

之一の冒頭に原著では〝Introductory — social organization〟とあるのを「人間」と訳して、「人の生ずるや、天 設けて互いに便利を得たりしことなれども、 以って身を全して、朝露の命を終わることを得るなり」、「人間開闢の初に於いては、固より相交わるの道 より之に与ふるに気力を以ってし、之に附するに性質を以ってし、此の気力と性質とに由りて外物の性に応じ、 use in schools, and, for private instruction, Edinburgh, 1852? をもとに福沢が訳して著した『西洋事情外編』 (human society) を教る者なし。 人間・人については、スコットランドの John Hill Burton の執筆によるとされている *Political Economy, for* 唯其の自然に希望する所と人気の赴く所に随って、 歳月を経るに従って、其諸法の内より至当なるものを撰んで終に一 知らず識らず交際の法則

(a science of social and political economy) と名けり」と記している。

科の学と為し、之を人間の交際及び経済の学

ある。

と人との間での「権利通義」としての同等と、 また、『学問のすすめ』では初編の冒頭に「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云えり」として、人 『西洋事情外編』では「人生の通義及び其職分」(バートンの原書では individual rights and duties) 人間の働きとしての「有様」とを区別している。このところは と重なるもの

権利通義としての同等は人間の本性に、働きとしての有様は人間の習性にかかわる。

ず。習慣を変ずること大切なりというべし」とある。 となり。 然の欠点にあらず、 きに至っては、 論なり」「けだし人の世に処するには、局所の利害得失に掩われて、その所見を誤るもの甚だ多し。 ることは容易に改め難きものなり」とある。『文明論之概略』の「緒言」でも、「文明論とは、人の精神発達 恥じず、論ずべきを論ぜず、人さえ見ればただ腰を屈するのみ。 必ず人に 諂 うものなり。常に人を恐れ人に 諂 う者は次第にこれに慣れ、その面の皮鉄の如くなり、恥ずべきをふらくのら いはその習慣と認めしもの、 立する事」のなかで、「独立の気力なき者は必ず人に依頼す、人に依頼する者は必ず人を恐る、人を恐るる者は 習慣は、福沢が特に重視した人間の行動傾向・様式である。『学問のすすめ』の三編の「一身独立して一国 今、我日本は外国人と利を争うて理を 闘 すの時なり。」「けだしその気象なくまたその勇力なきは、天 殆んど天然と人為とを区別すべからず。その天然と思いしもの、果して習慣なることあり。 習慣に由りて失うたるものなれば、これを恢復するの法もまた習慣に由らざれば叶うべから かえって天然となることなきにあらず」としている。「利を争うは即ち理を争うこ(②) いわゆる習い性となるとはこの事にて、慣れ 習慣の久し ある た

見て自分の身を伸び縮みするような」「まるでゴム人形」などという言葉もよく用いられている。 また、『福翁自伝』では習慣という言葉はかなり用いられているが、「個人の奴隷心」「権力偏 重」「先方の人を

既に触れたように『西洋事情外編』のなかで、「相交るの道」(human society)、「人間の交際」(social economy)、 人間交際は福沢の思想のなかでもっとも重視されていた特徴ではないかと考える。先の人間・人のところでも

にて、 際の起こる由縁なり」、「凡そ世に学問といい工業といい政治といい法律というも、・ られて、 「人間の交」(society)、「人間交際の道」(social system)など、そして『初編』 人間の交際あらざれば何れも不用のものたるべし」と強調していたところである。 更に 『学問のすすめ』の九編では「人の性は群居を好み決して独歩孤立するを得ず」、「即ちこれ では 皆人間交際のためにするものにがんこうきい 「外国交際」などの訳 が試 人間 交・ 2

際論 では is in the Family Circle)としている。『文明論之概略』 伝 の交際は専ら徳義に依りて風化の美を尽くせり」という。その後の著作『日本婦人論』 族で育った自 に比重をおいた家族論であり、新たな家族像、 分制度や儒教、「女大学」等にもとづく男女の交際の有り様を批判して、「一身独立」を基にして で、「家族」(family circle)が位置づけられて「人間の交際は家族を以って本とす」(the ground of social economy 家族も福沢が重視した側面であろう。『西洋事情外編』のなかでは先のバートンの文章を訳して「人間」 「夫婦の間敬愛なかるべからず」、「子に対して多を求む勿れ」、「子として家産に依頼すべからず」と記して (明治一九年)、『日本男子論』 「品行家風」 面では当時のスコットランド啓蒙思想の 身の経験をも多分に写し出している家族像であったともいえる。 のなかで自らの「家事家風」を語っていたように、 (明治二一年) 男女交際像を模索するものであった。 「家族」像に影響を受けたものといえるが、 なども、 のなかでも「夫婦親子一家にいるものを家族という」「一 人間交際論に関わるものでもあるが、 福沢自らが母子家庭で姉など女の多い のちの (明治一八年)、『男女交 他 福 一面では 翁百話』 「情愛」 封建社会の身 0) に次

なく 然にその仕 制度については、 虚威というものなり、 の貴きにもあらず、 来りに慣れ、 『学問のすすめ』 ただ。徒に政府の威光を張り人を脅して人の自由を妨げんとする卑怯なる仕方にて、 上下互いに見苦しき風俗を成せしことなれども、 今日に至りては最早全日本国内にかかる浅ましき制度風俗」、「学校の制度」(九年)の「金はやの制度」(九年)の「金は、これの一般のでは、10年)の「金は、10年)の「10 初編のなかで「世の中の人も数千百年の 古 よりこれを嫌 畢竟これらは皆法の貴きにもあらず、 いながらまた自

してとらえられてい

られている。 などのように用 いられ、 制度の 『福翁自伝』 掃除破壊」に意を用いて、 でも「封建制度」「封建の門閥制度」「古来の門閥制度」などのように用 新たな秩序の「建置経営」 はまさに進行されるべき課題

身躬からその身を支配して世間相交わり、 般の安全繁昌を致すを言うなり」として数多く用いられている。国内の文化や文明の有り様を対外的なかかわ 化の国」、「文明の国」が語られ、 様に福沢の考え、視点のなかで最も重視されたものである。 0) なかで論じ、『文明論之概略』 文明は、すでに『西洋事情外編』 のなかで更に詳しく論じられていくことになる。 『学問のすすめ』においてもその七編で「元来文明とは、 のなかで「世の文明開化」(civilisation) 相害することもなく害せらるることもなく、各々その権義を達して一 の項を設けて 文明の考え方は人間交際と同 「蛮野 人の智徳を進 Ö) 世、 半 開

ぐれて社会学的視点や社会学的問題を提起していたと考える。やや遅れて人間事象を考察する社会科学も、その らの人間の解放に始まったように、西洋や東洋の日本などさまざまな体験事実に支えられつつ因習的な、(55) は封建的な旧来の社会観を懐疑し批判して、 つの学問分野としての社会学も、こうした歴史的な文脈を背景にして生み出されていくことになる。 以上 の福沢の用語と考え方は、近代科学の誕生がF・ベーコン(F. Bacon, 1561-1626)のいう偏見や偶像 新たな社会秩序を模索して、 社会生活を解明していく試みとしてす (idols)か あるい

### 3 人間交際論と「社会」の発見 (構築)

外国語の邦訳語で、それが現代広く使われるにいたった。明治維新前後、 !などを意味する言葉であった。「"Society" 社」はもともとは土地の守護神、集団共同の土地神、 の邦訳名、社会、なる名称は古来よりの言葉ではなく、 それらを中心とした集落 society, société, societet, gesellschaft 部落・ 集団 体 明 世 の 治初期 中、 世

間

たが、 ことなく、勝利した「社会」が一人歩きしてきた感がないでもない。 従来の社会学史研究も、 養生之道」「社交」「会社」「社会」)、福沢諭吉(「世間」「会社」「人間交際」「社会」)、 をいかに邦訳したらよいかに、識者は非常に苦心した。」津田真 活事実としての「世間」「世の中」の側面への考察を持続的に深めていく機会も乏しくしていったともいえる。 なる邦訳名が勝利して、現代にかくも盛行するにいたった」という。 加藤弘之(「会社」「交際」)、中村敬宇(「仲間会社」「衆人結神」)など、同じ訳者でも時とともに訳名を変えたり 林恵海の表現によると、「これらのうち、会社・交際・世態・社会の四邦訳名が残存し、ついに ともすると、 訳語としての「社会」の意味するわが国での歴史的な内実や広がりを問 郎 しかし、 (「人間の公会」「人間仲間」)、 その「盛行」のために、人々の生 福地源一 郎 (「会社」「社会」)、 西周 (「人間相

たという側面だけでなく、 いうことに関心を向けていきたい。 そこで福沢諭吉が "society"を主に人間交際と訳していたことはすでにとりあげたが、「社会」 福沢が世間、 世の中、 人間交際、社会などをどのような脈絡で邦訳していったの が ただ勝

深く示唆を得るところが大きい。 i 世間」などについても狭い意味での 西洋事情外編』 柳父章『翻訳語成立事情』はこの辺のところをとりあげて「世間」と「社会」 仲間同志の結びつきや交際、 の「人生の通義及びその職分」(individual rights and duties) (ii) より広い範囲での生活組織や集合体の関係とに大きく分けて用い、 福沢は 「世間」と広い意味での 『西洋事情外編』 ゃ 「世間」 『学問のすすめ』などにおいても を文脈に応じて用いていたと考えられる。 のところで、 の用法などにも触れ 「社会」 てお 0) ŋ 興味

設けし制度を守ることなり。 (27) 人間交際の大本を云えば、 自 由 不羈の人民相集て、 力を役し心を労し、 各々其功に従て其報を得、 世 間 般 の為めに

とあるが、原文にあたる Educational Course, Political Economy, for use in schools, and for private instruction, William and Robert Chambers, London and Edinburgh, 1870(国立国会図書館所蔵)のなかでその文章は

whole, and receiving an appropriate remuneration, and each respecting an those laws which have been ordained for the The idea of perfect society supposes an assemblage of free citizens, each contributing his labours for the benefit of the

会とは「対立するような意味」で用いられているといえる。そして、『学問のすすめ』九編で「凡そ世に学問と・・・ petitive system)の見出し項では、society を「世間」と訳しているところも見出される。 重要視する考えは、『学問のすすめ』が初めてではないが、本論で社会学思想を考察するうえでも極めて重要で を浮世の虚名なりしとして殊更に避くる者あるも無理ならぬことなり」、「また一方より見れば社会の人事は悉皆を浮世の虚名なりしとして殊更に避くる者あるも無理ならぬことなり」、「また一方より見れば社会の人事は悉皆 入れているところは"for the benefit of the whole"の部分であり、他に「世間」にあたるという語がないにもかか である。この英文の society は周知のように「人間交際」と訳されているが、福沢が「世間一般の為に」と書き いい工業といい政治といい法律というも、皆人間交際あらざれば何れも不用のものたるべし」として人間交際をいい工業といい政治といい法律というも、皆人間交際あらざれば何れも不用のものたるべし」として人間交際を 虚をもって成るものに非ず」としている。この場合の世間はどちらかというと狭い世間を意味し、この世間と社 わらず「世間」という語を入れて訳しているところも見当たる。また、「世人相励み相競ふ事」(society a com general benefits. (p.4) 『学問のすすめ』の一七編、人望論(明治九年)で「やや見識高き士君子は世間に栄誉を求めず、或いはこれ

ある。

『福翁自伝』になると、例えば「剣術の全盛」のところで「世の中はただ無闇に武晴るばかり」、「当時少

之概略』 となる発想であったといえる。 として主として用いてきた人間交際の用語は社会という訳語で言葉として広まっていくにつれて福沢自身もこ に「社会の利害」「社会の交際」「著訳社会」「政治社会」などの用法がなされていた。それまで society の訳 進歩する世の中」などと記している。「人間は社会の虫なり」のところで「社会全体」、「日本社会の大変革」、 自伝』のなかでは、 世 間に頓着するな」とあり、「老余の半生」の「仕官を嫌う由縁」のところで「世間は広し」、「文明駸駸乎し |間に向くような人間はことごとく長大小を横たえる」。 『男女交際論』 人間交際の用語は殆んど用いていない。しかし、『西洋事情外編』 等においても、 この人間交際の考え方は独立自尊の考え方とともに福沢のもっとも基 他に「日本国中ただ慶應義塾のみ」のところでは 『学問のすすめ』『文明 他

沢のこの個人主義思想や関係論的視点の胚胎は、 るに由なし」として、 と無きを要す」、「人類相接せざれば互いにその意を尽くすこと能わず、 げていく過程で、より広く社会的なつながりを見出し構築していくものとして捉えられていたと考える。 も含めて中間レベルでのさまざまな諸集団とのかかわりのなかで、そして狭い世間や広い世間、 けられてい 社会有機体説、 家社会として論じら のすすめ』一七編、 沢にみる人間と社会の関係づけ かなかったともいえる。 (30) 国家本位主義や集団主義、 人望論で、「言語を学ばざるべからず」、「顔色容貌を快くして、一見直ちに人に厭わるるこ n 情報やコミュニケーションの重要性を指摘していた。 生活する人 々 (秩序づけ) 0 世 規範主義、 間 は、 その後の Þ 「世の中」、「市民社会」、 個人が人々の 民族主義的思考がかなり根強くなり、 生成期や確立期、 間 の具体的な行為としての人間交際を、 意を尽くすこと能わざればその 近代日本社会学の草創期における福 変転期においてはどちらかというと 日常生活には部分的にし 「社会」は多くは 世の中で繰り広 か眼 人物を知 家族 が 向

たい。

## (4) 社会変動論

動論 ば、「一身にして二生を生きる」として社会制度の掃除破壊と建置経営に生涯とり組んだ福沢の活動は、 男女交際論 社 の展開そのものである。 会変動とは、 等々と社会変動論に満ちた諸論が試みられている。 時間とともに、 『学問のすすめ』、『文明 社会構造を構成する役割、 論之概 略 制度、 旧 ここではいくつかの特徴に言及するにとどめ 秩序に生ずるあらゆる変化」 藩情』、 『分権論』、 『貧富 論、 であるとすれ 『民情 社会変

め かに れ 独立の活計は人間の一大事」、されど「人の性は群居を好み決して独歩孤立するを得ず」。「文明の効能 0) 九編、 この 場の戦争をもって止むものに有らず。 戦争の変動は既に七年前に止みてその跡なしと雖ども、 明治七年)。 故にこの変動は戦争の変動に有らず、 人心の変動は今なお依然なり」(『学問のすす 文明に促された人心の変動 な

歩」「勇を振て我思う所の説を吐くべし」とする多事争論の必要を強調する。 明」「半開」 文明の精神 て文明に導くためには、 文明論之概略 「野蛮」という巨視的な文明の比較と進歩発展の段階が設定されている。そして時節と場所とを考え (人心風俗、 (明治八年)では、 人民の気力) 古習虚飾の惑溺を戒めて「精神の活発、 の二つがあり、 「文明論とは、 その精神の発達には智徳の進歩こそ重要であるとする。 人の精神発達の議論なり」として、 人と人との交際の必要」「独 文明には文明 個 人の自由と進 0 事 物 لح

と」、「上下士族相互に婚姻の風を 勧 ること」を挙げてい 消する積極策はなかなか見出しにくく、 人心の変動であり、 旧 [藩情] (明治一〇年) 後者は身分間・階級間の婚姻、 で旧中津藩の上下両等の士族間の栄誉利害の身分差を詳しく指摘してその身分差を解 消極ではあるが、「旧藩社会」を変えるには「今の学校を盛んにするこ 通婚圈 る。 の拡大、 前者は新たな学校のすすめ、 新たな人間交際のすすめである。 学問のすすめによる

権に 地 論 政権を授受すべきこと、そして来るべき国会開設にあたっては政権を得た者が永世不変、 ようにと説いた。 て自ら進歩すべし、文明の利器を利用するのは進取の人であり、 通によるところが大であり、 文明開化は、 0) 民情 か 便宜を図るため警察、 (明治一〇年) かわるところは 新 (明治一二年) 蒸気船、 また、 において全国一 国内各地に分権化すべきことを説いていた。 国家として明治政府が成立して次第に中央集権化が進もうとするなかで福沢は 蒸気車、 道路、 は、 その力が民情、 新たな国会開設を前に民情 電信、 堤防、 般の 組税、 郵便、 学校、 社会の心情をもたらしている。 外交、 印刷等 衛生などにかかわる 貨幣、 (文明の利器) 徴兵などにかかわる「政権」 新の必要を説いて書かれたものである。 今世において国安を維持する方法は平穏 の発明工夫がもたらした交通往 「治権」 保守の主義と進取の主義が相 (administration) (government) ム国 長座を謀ることの とを区別して、 来 西洋 対 0 社 『分権 間 会交 な 峙 諸 玉

の文明 くの されていくと考えていた。 であった。 でとの人間 もまた習慣の力であり、 の利器、 は習慣の力は根強く、 交際、 異文化体験などの外発的・ 情報伝達と議論、 より重視したの 変えるのは難しいが、 社会を変えていく力は、 公議輿論、 は自らの 外生的要因と、 多事争論などの内 内側からの変化であり、 人々の気力や智力を変えて「人心の変動」 外からの刺激や圧力、「西洋化」、 人々 の自らの気力と智力、「人心の変動」、 発的 内 さまざまな多くの人々との 生的要因との 文明の 相互 0 事物、 を促し回 触媒によっ さまざまな 蒸気船 人間交際 復して て促

## (5) 科学方法論

的 思惟方法が社会的 本論 最初の ところでも触 事実 0 取 り扱いに与えた影響は……とくにそれが顕著にみとめられるのは れ たが、 蔵内数太は幕末の帆足万里 0 『窮理 通 などを挙げながら、 福 沢 諭 「西洋 吉の 思 0) 科学 想

ある」としていた。

角測量 ②智見を交易する(相互交換)、③智見を散ずる(発表)、 と演説とに至っては必ずしも人と共にせざるを得ず」と示唆に富む言及をしている。①智見を集める 事象・人間に接して距離を置いて懐疑してみることの大切さを説いているのは、科学方法論の出発点でもある。 たといえる。『学問のすすめ』一五編「事物を疑って取捨を断ずる事」(明治九年)のなかで、「信の世界に偽詐〟といえる。『学問のすすめ』一五編「事物を疑って取捨を断ずる事」(明治九年)のなかで、「信の世界に偽詐 きを疑い、取るべきを取り、捨つべきを捨て、信疑取捨その宜しきを得んとするは難きに非ずや」とまず事物 かに見い出せる。 稲荷様の神体を見る」などの体験をしたり、 社会事象の経験的事実について客観的因果的に説明しようとする科学的方法の試みは、 疑の世界に真理多し」、「この雑踏混乱の最中に居て、よく東西の事物を比較し、信ずべきを信じ、 読書はもって智見を集め、 の活動は、 科学的方法と活動にも連なっていく。 西洋の啓蒙思想に触れる以前に『福翁自伝』の幼少時の体験として「反故を踏みお札を踏む 談話はもって智見を交易し、著書演説はもって智見を散ずるの術なり」「談話 少し距離をおいてものごとを観て考えるという姿勢は一貫してい 行為の相互の重要性を指摘していて興味深い。 福沢の多くの著作のな (収集)、 疑うべ

様と彼の一体の有様とを並べて、双方の得失を残らず察せざるべからず」とする。更に一国内にとどまらず、「所業」を比較してみることが重要となる。「有様を比較するとはただ一事一物を比較するに非ず、その一体の有 を試みた『民情一新』 都鄙別、 八六〇年)、『西航手帳』(文久二年、一八六二年)、『西航記』(文久二年)、『旧藩情』 福沢の旺盛な好奇心と社会観察の事例は、 智愚別、 年齢別でいずれが保守の主義、 (明治一二年) などにも数多く記されている。観察される (た) 事象や「有様」、「所論」や 『福翁自伝』、「万延元年アメリカハワイ見聞報告書」(万延元年、一 進取の主義に従うかなどに関する福沢の観察智見(仮説)など (明治一〇年)、更に一例として

ものならん」として、『文明論之概略』の構想や考察にも重なっていく。 「もし一国を全体の一物と視做して他の文明の一国に比較し、 加減乗除し、その実際に見われたるところの損益を論ずることあらば、 数十年の間に行わるる双方の得失を察して互いに その誇るところのものは誇るにたらざる

えで好んで重視され用いられた方法が統計法であった。(39) 特に事象や働き「その一体の有様と彼の一体の有様とを並べて」(比較して)、「双方の得失を残らず察す」るう 日本国においては軽く視ている」として、「有形において数理学」と「無形において独立心」を強調した福沢が、(38) 学問のすすめ』 「人間万事、数理の外に悦すること叶わず、独立の外に依るところなしというべきこの大切なる一義を、 (初編)のなかで特に重視していたのは「専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学」であった。

とができる。 態やその重要性を統計的手法などの科学方法論を実験、 に区別し、 き大なる便利あり。そもそも事物の働きには、必ずその原因なかるべからず。この原因を、 通じて規則性・定則 久しき時限の間に広く比較して、その事跡に顕わるものを記すの法」が統計、「スタチスチク」であり、それを 無形の学問」 文明論之概略』 近因は見易くして遠因は弁じ難し」とする要因分析なども興味深い。 福沢の のなかでもこのような形で活かされているといえる。 のなかでも穀物の物価と婚姻の数などの関連などのように「天下の人心を一体と視做して、 若い時からの適塾などでの (regularity) が見出され、「この趣意に従て事物を詮索すれば、その働の原因を求めるに付 「窮理学」や「有形の学問」への関心、「目的なしの 活用して実証しようとしていた福沢の姿勢を窺い知るこ 変動期にあって人心の変動 近因と遠因との二様 勉強 が

### 四 むすびに

創期、 沢の社会学思想を中心にとりあげて日本社会学史研究のもうひとつの可能性を探るという問題提起を試みた。 を著した西周 和八〜昭和二〇年終戦までの変転期、 である。 と分けたときに、 この小論は、 明治一〇年代~三〇年代の生成期、 冒頭の そして福沢諭吉などのこの期の社会学思想についての研究が必要であると指摘した。ここでは 「近代日本における社会学の草創と福沢諭吉の社会学思想の再考察」と題して検討を試みたも 特にわが国の社会学思想史研究の遅れを反省し、啓蒙思想家で『百学連環』『生性発蘊』 近代日本における社会学の草創」 昭和二〇年終戦~昭和二八年までの新たな模索期、 明治四〇年代~大正七年の形成期、 では、 その展開の時期を幕末から明治 大正八年~昭和七年の成立期、 更に現代社会学の ○年頃までの など 時 昭 期 草

端を想像す」の考えをもとに弾力的に思想化を試みていったといえる。そう考えると、福沢を一方的に極端なイ デオローグに仕立てたり、 れ 考えを示唆に、 かに極端に凝り固まったり傾いたりすることなく溺れることなく、時と場所に応じて、そして「事をなすに極 批判精神、 (b) 学問による思想化、 福沢諭吉の思想形成の特徴\_ 更に思想形成の三角測量 (4)「惑溺」への戒めをとりあげて、 偶像化してしまうことも戒められなければならないと考える。  $\widehat{\mathbf{c}}$ は、 歴史状況における再解釈による思想化に触れて、(a)(b)(c)のい (triangulation) 大まかな把握ではあるが、 ①智見を集め、 の観点から、 彼の思想化の特徴として(a)経験の思 ②智見を交易し、③智見を散ずるという 彼の  $\widehat{1}$ 旺盛な好奇心、  $\widehat{2}$ 起業心、 ず

味していたのである」という武田良三などの先駆的な示唆を受けて、社会学的な準拠枠に照らして福沢の(1) 社会学を実践したというべきある」という蔵内数太、「福沢の人間交際の論とはまごう方なく一個の社会学を意 次に 福沢諭吉の社会学思想についての再考察」のところでは、 福沢は「社会学の学論はしなかったが、

啓蒙思想の導入と創成、 動 論、  $\widehat{5}$ 科学方法論を検討した。  $\widehat{2}$ 新しい社会秩序の模索、 3 人間交際論と「社会」 の発見 (構築)、  $\widehat{4}$ 社会変

要である。 が著書 業、 る 研究が深められる必要があろう。 たな思想・ 新 出てくる以前のそれぞれ の学問動向を次々と紹介導入しようとすることに急いで、じっくりと自らの足元の土壌を耕して事を進め 世 「現実へ 学問を深めていく作業がなおざりにされ続けてきたのではないだろうか。 「界の社会学の展開、 日 理論、 の追随と導入理論 本社会学史-導入理論とが相互に媒介されてこそ、新たな展開、 社会学思想史の展開の同時代史に照らしても、 |形成過程と思想構造||』(一九七九年) の国の土壌のもとで社会学の草創期の啓蒙思想家、 のもたれかかり」という特徴を指摘しているところを改めて考えてみることも 明治期において後進日本の近代国家建設の過程で、 のなかで近代日本における社会学の展開 経験、 具体的な社会学書や社会学的 洞察、 百科全書的な思想家などについ 自らの 啓蒙が可能となる。 先進欧米列国の最先端 経験や現実と他 な研 0 経験 に見ら 秋元律郎 究書 る作 ても 0) 新 最 が

どの生成期以降を出発点とする近代日本社会学史研究が多かったように思える。 思想をあらためて対比しながら深めて考察していくことが今後の課題である。 を社会学思想史の領域でも更に再検討していく試みが必要である。 これまでは、 明治一 ○年代以降のフェ ノ ロサ **『フェノ** 口 サの社会学講義』、 福沢諭吉、 外山正一、 西周 近代日本社会学史研 5 の特に啓蒙思想家の 有賀長雄、 建 究 部 0) 可 遯 能

 $\widehat{1}$ 頁。 生 合隆男 書は社会学史研究の領域からいえば 『近代日本社会学の展開 は  $\widehat{b}$ 領域 に位置づ けら 学問  $\widehat{\mathsf{d}}$ 運動としての社会学の制度化-0) 領域 また拙書 『近代日本における社会調 恒星社厚生閣、 査の 軌 跡 恒 九 社厚

5

湯本豪一編

|図説

- $\widehat{2}$ 学』、早稲田大学七十五周年記念出版、一九五七、三七六頁、 民社会』弘文堂、一九六四、二五八~二八〇頁。 武田良三「わが国における市民社会の形成と社会学」社会科学部門委員会編 武田 「日本の市民社会と社会学」『産業社会の展開と市 『近代日本の社会科学と早稲田
- 3 蔵内数太『社会学 増補版』培風館、一九六六、八二~八三頁。
- 4 大道安次郎『日本社会学の形成 九人の開拓者たち』ミネルヴァ書房、一九六八。
- 6 神山四郎 福沢諭吉の文明史論」 内山秀夫編『一五〇年目の福沢諭吉―虚像から実像へ―』有斐閣選書、 一九八

明治人物事典―文化人・学者・実業家―』日外アソシエーツ、二〇〇〇、四三一~四三五頁。

7 8 長尾正憲 同、七~八頁。 『福沢屋諭吉の研究』

莊

二~六頁

9 記している。 会』慶應義塾大学出版会、一九九八。 福沢諭吉 「演説の法を勧むるの説」『学問のすすめ』十二編、岩波文庫、 松崎欣一 『三田演説会と慶應義塾系演

思文閣出版、

一九八八。

福沢は

『福翁自伝』

のなかでこの起業を「一大投機」と

- 10 玉置紀夫『起業家福沢諭吉の生涯―学で富み富て学び 有斐閣、二〇〇二。
- $\widehat{11}$ 福沢『文明論之概略』岩波文庫、 一九九五、 第二章。
- $\widehat{12}$ 同書、 四九頁。
- 13 第一九卷所収、 える野帳である。 文・長尾政憲)、 新訂 「西航記」(『福沢諭吉選集』第一巻所収、岩波書店、一九八〇)、「西航手帳」「慶応三年日記」(『福沢諭吉全集』 福翁自伝』ワイド版岩波文庫、一九九二、一三二~一三三頁。福沢「万延元年アメリカハワイ見聞報告 一九六二)、『西航手帳(文久二年)』(復刻、 福沢諭吉協会。これらは、いずれも福沢の現地での観察や見聞を記したフィールド・ 福沢の用意・準備周到な姿勢をみることができる。 福沢諭吉生誕百五十年記念出版) (解説 解読、 ノートともい
- 14 森有正 九九三、六一頁。 『経験と思想』岩波書店、 一九七七、一六~一七頁、一一一頁。 松沢弘陽 『近代日本の形成と西洋経験

- 15 想─』慶應義塾大学出版会、二○○九、特に「第三章 A・M・クレイグ「ジョン・ヒル・バートンと福沢諭吉—『西洋事情外編』の原著は誰が書いたか—\_ 十一号、一九八四、アルバート・M・クレイグ著(足立康・梅津順一訳) ジョン・ヒル・バートンの 『文明と啓蒙-『政治経済学』」を参照 —初期福沢 諭 『福沢諭 思
- 16 板倉卓造「『学問のすすめ』と Wayland's Moral Science」『三田政治学会雑誌』 第九号、一九三四
- <u>17</u> 選書』十二)、一九七五、 (三田史学会)第二四巻第二、三号、一九五○、河野健二「啓蒙思想家としての福沢諭吉」(慶應義塾大学『福沢記念 A・M・クレイグ著、前出、玉置紀夫著、 山脇直司『社会思想史を学ぶ』ちくま新書、二〇〇九。 前出、 板倉卓蔵、 前出、 間崎万里 「福沢諭吉の 『西洋事情』」 『史学』
- 18 二〇〇九。 戸沢行夫 『明六社の人びと』築地書館、一九九一、『明六雑誌』(上・中・下)岩波文庫、一九九九、二〇〇八、
- 19 林恵海「日本社会学の発展」日本社会学会編『教養講座 社会学』有斐閣、 一九五三、三〇七~三一四 頁
- 20 九九一、六三~六八頁。 P・M・ハウザー(Philip. M. Hauser)著、 小山隆・細井洋子訳「社会学」『ブリタニカ国際百科事典』 第九巻
- (21) 『文明論之概略』「緒言」、岩波文庫、一九九五、九頁。
- 22 岩波文庫、二〇〇一。 同、一一七~一一八頁、 丸山眞男「福沢における「惑溺」」 丸山眞男著・松沢弘陽編 『福沢諭吉の哲学、
- (23) 『西洋事情外編』(『福沢諭吉選集』第一巻、一九八○)、一六七頁。
- (24) 『学問のすすめ』岩波文庫、前出、一五頁。
- 25 ランシス・バーコン、 福沢は『西洋事情初編』(『選集』第一巻)のなかの「文学技術」 デス・カルテス等の賢哲」として触れている。 のところで、 一一六頁。 ベーコンやデカルトのことを「フ
- (26) 柳父章『翻訳語成立事情』岩波新書、一九八二、三~二二頁。
- (27) 『西洋事情外編』前出、一七〇頁。
- (28) 柳父章、前出、一七頁。
- (2) 『学問のすすめ』九編、前出、八三~八六頁

- (30) 川合『近代日本社会学の展開』前出、三九~四六頁。
- 31 P L・バーガー (安江孝司・鎌田彰仁・樋口祐子訳) 『バーガー社会学』学習研究社、 一九七九、二一頁。
- (32) 蔵内数太『社会学 増補版』前出、八一頁。
- 33 る距離 マックス・ウェーバー (Distanz)」、「距離への習熟によってのみ可能」という指摘とも重なる。 (西島芳二訳)『職業としての政治』 角川書店、 九 五 九 のなかの 「事物と人間に対す
- 34 『学問のすすめ』、一〇七頁に「「ヲブセルウェーション」とは事物を視察することなり」とある。
- 35 36 同、「リーゾニング」とは「事物の道理を推究して自分の説を付ることなり」とある。 『学問のすすめ』前出、 一〇九頁。
- (37) 同、一一一頁。
- (38) 『福翁自伝』前出、二〇六~七頁。
- 39 月。 西川俊作「「然るに統計の実験に於ては」 福沢先生の統計的方法・断章―」『三色旗』二六〇号、一九六九年十
- 40 Alan Swingewood, A Short History of Sociological Thought, Macmillan Press, 2000.
- 秋元律郎 『日本社会学史―形成過程と思想構造―』早稲田大学出版部、 一九七九、特に第八章を参照。

41